

第6回ホッとネットおおさが 避難者交流会を開催

避難者
交流会

8月24日、東日本大震災より関西に避難している人たちが支援団体、高校生たちなど約110人が集う交流会を開催しました。この交流会は、年に1回、大阪府下避難者支援団体等連絡協議会（ホッとネットおおさが）が主催しています。



設営準備からそうめん流しまで生徒会執行部が大活躍しました

英真学園高校で

垣根を越えた交流

淀川区十三駅の近くにある、英真学園高校は、これまで生徒会役員が中心となつて、バザーや模擬店などの収益金をホッとネットおおさがに寄付し、間接的な避難者支援を続けてきました。今回の交流会は、初めて、同校を会場として、開催することになりました。この日は、生徒会執行部や軽音楽部など40人以上の生徒が参加し、オープニングや交流スペースでの演奏や運営の手伝いなど交流会を盛り上げました。



サンドリの代表森松明希子さんが生徒に当事者の想いを語りかけました

ホッとネットおおさがは、107団体（2019年2月時点）の支援団体が加盟していて、交流会では、法律・不動産・医療・健康などの相談ブースや避難者の俳句や絵本の展示コーナー、ヒルトン大阪やお点前ボランティアによる喫茶コーナーなどをそれぞれの団体の得意分野を活かしたブースを出展しました。また昼食には、流しそうめんとかきやきの振る舞いがありま

した。初めて流しそうめんを体験する参加者も多く、竹に流れるそうめんをすくいながら、避難者、生徒、支援団体など所属や年齢の垣根を越えて、会話が盛り上がり、笑い声があちこちから聞こえてきました。

当事者が語る避難の現状と願い

昼からは、東日本大震災避難者の会Thanks&Dream（サンドリ）から福島県など震災における避難者による「当事者の語り」がありました。同校3年生の生徒会副会長の大石昇弥さんは、「今まで寄付を集めたりしていたけど、実際に交流会に参加して、当事者の語りを聞いて、心に響きました。ニュースでは分からなかったことが、理解が深まって、どうにかしないと」と思いました。歴史を忘れないために交流会を続けてほしいです」と話しました。

震災から8年が経過し、避難者からは、「支援の打ち切りが続く中、避難の教訓を伝え続ける機会を続けてほしい」という声があがっていました。